

以前、対話の共通基盤が持てない相手への対処を取り上げました。そこで想定していたのは「対話なんてしたくない」という人の存在でした。それとは別に、「対話ができない」という人もいます。その場合、合理的配慮を提供しようと思って対話を持ちかけても、なかなか話し合いにならないことがあります。そんなときでも、対話的な心構えを維持することはできるかもしれません。

## 対話が始められないとき

合理的配慮を対話的に進めるためには、まず学生から困り事を伝えてもらう必要があります。しかし、課題で何を求められているのかわからなければ、どこでつまづいているのか人に伝えることもできません。どんな配慮をしてもらえばいいのかもわかりません。

教職員が質問するなどして、教職員側は学生の困り事がわかってきたとしても、学生側は教職員の提案の意図や意味がわからないということも起こりえます。こうなると、一般的な意味での話し合いの進展は難しそうです。おそらく、自分の事情を伝える、相手の事情を理解するというにも一定の認知機能・思考機能が必要で、それが担保されていないときには、いわゆる対話を始めることが、そもそも難しいということもありえるのでしょう。



## 対話的な心構えで時間をかける

対話に一定の機能が必要なのであれば、それを有していないこともハンディの一つと考えられます。つまり、「対話ができない」として自体を、その学生が抱える事情として、対話的に受け取ることは可能かもしれません。その場合、具体的な配慮内容は見えてきませんが、「現状はこれで致し方ない」と受け入れることが、ある意味では合理的配慮と言えるかもしれません。

そうして致し方ない現状を抱えながら時間をかけていくと、次第に学生にとってよりよい出口や落としどころが見えてきます。それは文字通り時間が解決ということもあれば、一緒に考えてくれる関係者が増えることによる場合もあるでしょう。また、必ずしも教職員や学生が当初望んだ着地点ではないかもしれません。しかし、時間をかけて吟味した落としどころというのは、双方にとって比較的、傷つきが少なくすむものです。

